

六、ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

(体制を変える)

ルカによる福音書第四章一六—三〇節

私たちは聖書が「貧しい人々」について多くのことを語っていることを発見しつつある。聖書の使信は、時々、あたかも貧しい人々のためだけに限定されていて、残りの私たちは無視ないし非難されており、せいぜいのところ、やっと五回目の抽選で拾われるぐらいにしか思えない。

聖書の中では貧しい人々が大きな注目を集めているというのに、教会では貧しくない人々が多大の注目を集め、大抵は、彼らが教会運営をする結果になっていることは、すべてが歪んでいるようにさえ見える。こうなってしまった理由の一つは、貧しくない人々が聖書の公的な解説者となり、貧しい人々のことを取り扱っている記事からほとんどの刺が取り去られているからである。「貧しい人々」に関するルカの率直な語り方は、もっとバランスのとれたマタイの「心の貧しさ」

に照らして解釈されなければならない、と私たちは教え込まれているのである。なぜならば、その方が（衣食住と仕事の欠如といった）「物質的貧しさ」の荒々しい現実が纏わりついてこないからである。「霊的な貧しさ」は、事実、キリスト者の徳目となっている。私たちは、財産や所有物には重きを置かず、かと言って、すべてを捨て去る必要があるとは勧めないような生活様式を持つようにと促されているのである。すべては姿勢の問題だというわけである……。

私たちがこの種の論理を——教会が何世紀にもわたって巧妙になしてきたように——強調すればするほど、聖書はますます迫力のないものになってくる。もし人々が物質的に裕福であろうと窮乏していようと、「心が貧しく」なることができるのであれば、私たちは「内なる」生活に集中して、経済秩序の性質とか世界の富の公正な分配とか貧しい人々を保護する必要とかいった、「外なる」生活の側面から福音を隔離しておくことができることになる。

このような結論に挑戦する旧約聖書の記事について私たちはすでに見てきた。しかしこの問題は新約聖書においても取り上げられている。もし出エジプトが旧約聖書にとってパラダイムの物語であるならば、ナザレの会堂でのエピソードは新約聖書にとってのパラダイムの物語である。以下の記事ほど一貫して第三世界のキリスト者によって言及される記事はない。それもそのはずである。イエスはそこにおいて、私たちが彼の使信を「精神化」してしまいうりかたに対して明

白な挑戦をしているからである。

聖書のテキスト ルカによる福音書第四章一六―三〇節

それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、

「主の御霊がわたしに宿っている。

貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、

わたしを聖別してくださったからである。

主はわたしをつかわして、

囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、

打ちひしがれている者に自由を得させ、

主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。

イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイ

エスに注がれた。そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆して言った、「この人はヨセフの子ではないか」。そこで彼らに言われた、「あなたがたは、きっと『医者よ、自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであらう」。それから言われた、「よく言っておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリアのナアマンだけがきよめられた」。会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち、立ち上がってイエスを町の外へ追い出し、その町が建っている丘のがけまでひっぱって行って、突き落そうとした。しかし、イエスは彼らのまん中を通り抜けて、去って行かれた。

話は小さな町の会堂における安息日の礼拝の記事であり、平凡な話のように見える。とても高級ドラマの材料にはなりそうもない。しかしながら静けさの中から始まる場面は、ゲスト・スピーカーであるイエスにリンチを加えようと企てる場面に至って頂点に達するのである。

一人の郷土出身の少年が故郷に戻ってきた。彼はしばらくよそに出ていたのだが、何をやっていたかは誰もよく知らなかった。父親と一緒に働いている工務店の材木の買付けに出かけていたのでないことは確かである。たとえ何をしていたにしても彼は元気で無事に戻ってきて、ちょうど以前のように、家族で座っていた席に座った。

そこで人々は彼に聖書日課を読んでくれるように依頼した。日課は御馴染みの記事で、希望と約束に満ちたイザヤ書第六章であった。聴衆のほとんどはその個所を暗記していた。今夜は聖句が新しい美しさを伴って聞こえてきた。実際、彼の読み方がとてもうまくいったからである。彼は読み終えたのち巻物を係の者に返し、人々が今耳にした言葉は今まさに成就したと述べた。

聴衆は魅了されていた。何と雄弁なことだろう。言葉遣いは明確だし、しかも落ち着いている。声は明瞭で押さえもよくきいている。イエスの家族との付き合いがあまりなくなっていた二、三人の人は、はっと気がついて驚いて言った。「あれはヨセフの子ではないか」。果たしてそうであった。一筋下がったところの家の子供であった。その幼いイエスが今や大人になって、こんな

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

立派な印象を与えているのである。母親は何とも誇らしいに違いない。一人の視線が母親の視線を追おうとすると、彼女は目をそらせた。自分の息子が認められたことが嬉しくて恥ずかしいのである。

ところが、ヨシユア（私たちはイエスと言っている）はいいところで止めておくべきことをよくわきまえず、説明し始めた。それは戦術的には失敗であった。好評を博したことに對して、彼は拒否反応を示した。そして彼は、過去に飢饉と疫病があつて神の助けが待ち望まれた時、神は實際おいでになりはしたが、熱心に待ち望んでいた人々ではなく、異邦人のところにおいでになったということを語ったのである。

イエスがこのような不快な考え方を展開してゆくにつれ、それまで彼が放っていた魅力はぶちこわしになった。会堂の雰囲気は冷たいものになつていった。これはいったい何の話だ。教会に行きもしないで家でテレビを見ている連中の方が、神の御名を讃えるためにいつも（かなりの不便を押して、と付け加えてよいかも知れない）教会に来てゐる私たちよりもっと神から関心を持たれていると言っている。生意氣なこの若造は何者か。イザヤ書にある有名な言葉にそんな意味があると彼は考えているのか。何という忌まわしい異端だ。その場の雰囲気は沸騰点に達した。クラレンス・ジョーダン、人々の反応を描写している節を、「これを聞いた時、全会衆

は怒りで爆発した」と翻訳している (*The Cotton Patch Version of Luke and Acts*, p. 25°)

話は文字どおりスリルに満ちている。怒った聴衆はイエスを会堂から追い出し、ナザレを取り囲む高い丘のてっぺんまで全員で引っぱって行った。彼らには目論見があった。目につく一番険しい崖の上でイエスを三回振って、三回目に放り投げようというのである。故郷に戻ってきて、年長の者たちを言い負かそうとした少年もこれでおしまいというわけである。

ところが、多分暗闇と漂う混乱のゆえに、イエスは何とか逃げ去り、その晩リンチは行なわれなかった。しかしイエスはこの経験で懲りることなく、頑固にも同じ不穏な使信を各地で説き続けていった。そして二年後には、別の群衆が彼を捕え、ここは違う町のもう一つの丘の上に連れて行き、今度こそ逃げられないようにしてしまうのである。

考察と議論のための課題

五つの点に光を当ててみよう。

- 1 イエスの聴衆はなぜあれほど激しく反発したのであるか。この問いに答えるために、も

う一つの質問をしてみよう。状況が逆転することによって最も脅かされるのは誰であろうか。答——現在の状態で成功をおさめていて、それゆえに現状に満足している人々である。彼らが変革の提案に対して抵抗することは当然のことである。

もし服役者たちが自由になったら、最も脅かされるのは誰であろうか。答——看守たちである。彼らは職を失うだけではない。解放された服役者たちが投獄中の取扱いについて怒りを抱いているとしたら、命すら失うことになるかも知れないからである。

もし抑圧されている人々が解放されたら、最も脅かされるのは誰であろうか。答——他の人々を搾取して自分たちの繁栄を築いた抑圧者たちである。

変革によって最も脅かされ、「逆転」の話で最も動揺し、そのような話を封じ込めたり、あるいはそのような話をする人を根絶したい気持ちになるのは、経済体制や政治構造あるいは宗教制度から利益を得ている人々である。彼らが意図的に抑圧を目論んでいる場合であっても、また他の人たちの抑圧行為から生ずる利益を黙って受け取っているだけの場合であっても、同じである。

そしてすべては現状と違うようになることができるという知らせを聞いて、最も興奮を憶えるのは誰であろうか。答——経済体制、政治構造、宗教制度の犠牲者たちであり、それらの体制が圧迫し、そして滅ぼそうとしている人々である。

2 イエスの使信の核心は明瞭であり、それは「貧しい人々への良き知らせ」である。それは私たちが今学んでいる記事の他にも、ルカによる福音書第七章、マタイによる福音書第十一章、イザヤ書第六章など、同様の数多くの記事の中にある主題である。私たち貧しくない者はこの事実と直面しなければならない。そうすることは難しいことである。その理由は、もう一つの問題、すなわち「貧しい人々への良き知らせ」があるとするならば誰が失う立場にあるか、という問いが続くからである。答——貧しくない人々、婉曲的でない言い方をすれば、金持たちが失うことになるのである。もし「逆転」が来たるべき日の命令であるとすれば、それは、貧しい人々もはや貧しくなくなることであり、金持ももはや金持でなくなることを意味している。金持の中の誰もそんなことを望んだりはいしない。それゆえに、すでに触れたように、「貧しい人々」についての意味を「精神化」したりすることになるのである。

これらの章句に関する北半球の注解書は退屈極まる説明で満ちている。「貧しい人々」という言葉は「内なる精神的意味」において理解しなければならないとか、「囚人、盲人、打ちひしがれている者」と記述されている人々は「内的抑圧、神経症、その他の精神的疾患」の犠牲者のことであるとか、「捕囚」は現実の刑務所にいる人々とは何の関係もなく「魂が陥るかも知れない」

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

い内面の、しかし恐ろしく現実的な拘束」を意味しているとか、山上の垂訓の祝福の中で「貧しい人々」について語られているところで「イエスは救いの霊的あるいは内面的性格を最も強調している」といった具合である。（その他の事例については、拙著 *Theology in a New Key*, pp. 83—84 を参照。）

第三世界の人々が貧しい人々に関する聖書の取扱いをどのように解釈しているかについて私たちが耳を傾けて聞く時、一つの事実が際立ってくる。それは「精神的」解釈はどれも怪しいということである。「貧しき者」という言葉の釈義的研究については、コスタリカの聖書学者エルサ・タメスなどが行なっているが、そこで実証されていることは、「イエスが、『（主は）貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してください』というところを読んで、御自身の上に成就した約束について語った時、彼は生活の基本的必要に事欠いているすべての人のことについて語っていた。彼が、『あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ』（ルカ六・二〇）と言った時にも、彼は物質的貧困について語っていた」ということである。

聖書の中の貧しい人々は無力な人々、暮しに困っている人々、飢えている人々、抑圧されている人々、貧窮している人々、屈辱を受けている人々である。彼らをこんな状況に置いたの

は自然がしたことではない。彼らは権力者によって不当に貧しくされ、略奪されているのである。(Tamez, *Bible of the Oppressed*, p. 70)

この解釈からどのような分析に導かれるであろうか。グスタボ・グティエレスはこの作業を進めてゆく上での手助けをしてくれる (*A Theology of Liberation*, 特に第一三章「貧困、連帯、抗議」を参照)。彼は「貧しさ」をすでに述べたような「精神的貧しさ」に変形させようとするすべての企てに対抗して、物質的貧困すなわち豊かな人間生活を送るために必要な経済的物資が人類家族のおよそ七〇パーセントにおいて欠乏している非情な現実を強調する。物質的貧困が明らかに悪であるという認識を持つことは最低限必要である。『解放の神学』の中で導き出されているグティエレスの、「貧しさ」に関する三つの相違点はエルサ・タメスの結論を補強するものとなっている。

a、「貧困は人間の尊厳に反する恥すべき状況であり、それゆえに神の意志に背いている」(p. 291)。ヘブル語の「貧しき者」に相当する英語は、はかない者、弱い者、身をかがめた者、卑しめられている者などである。新訳聖書のギリシャ語「プトーチス」(ptochos)は、「生存に必要なものを持たず」、屈辱的な物乞いを強いられている人を意味している。さらにグティエレスと

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

タメスの両者が強調していることであるが、貧しい人々は自分たちの間違いや運命のゆえに貧しいのではなく、「弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、苦しむ者の道をまげ」る抑圧者の不正義のゆえに貧しくなっているのである（アモス書二・七）。このような貧困および貧困を引き起こす社会的状況は聖書を通して一貫して非難されている。ヨベルの年とは、そのような不正義と貧困を一掃するために、社会的諸条件を意図的に再編する年であった。

b、聖書的概念には「霊的幼さ」としての貧しさもある。それは神への信頼であり、物質的保証に頼らず、徹底して神の役に立とうとする意志である。

c、貧しさの最も完全な聖書的理解は（a）と（b）の組合せであり、貧しき者との連帯と貧困に対する抗議を含んでいる。それは、貧しさを良いこととしては受け入れないで、犠牲者との結束と団結を通して貧しさに反対してゆくことである。初代教会における財産の共有は、「貧しさを理想化していたのではなく、むしろ貧しい人々がなくなるようにすること」であった（p. 301）。

3 もしそれが本当に聖書の使信であるならば、私たちはどのようにに応答すべきか。ラテン・アメリカのローマ・カトリック教会は私たちの想像を絶する貧困の渦中に置かれているが、司教たち（跳ね上がりの司祭たちや信徒たちではなく、司教たち）は一九七九年にメキシコのプエブ

ラで行なわれた会議において、教会は「貧しい人々のための優先的選択」をしなければならぬという結論を出した。教会の第一の関心事は、物質的に貧しい人々に仕え、共に働くものでなければならぬというのである。

これは何を意味しており私たちはどのように応答するのか。

a、選択は「優先的」選択であつて排他的選択ではない。それは貧しくない人々に関心がないことを意味してはいない。それが意味していることは、貧しくない人々に対する関心は貧しい人々に対する関心の文脈において取り扱われるべきで、その逆ではないということである。見かけ以上に根本的なところから問題把握がなされているのである。

b、司教たちは「青少年のための優先的選択」のためにも教会をささげている。貧困の最もひどい犠牲者は子供たちであるがゆえに、「貧しい人々」と「青少年」のための二つの優先的選択は相互補完的である。「(神の国の)唯一の特権階級は子供たちであろう」という表現はこの相互補完性をとらえており、神の国を的確に表現している。

c、当面の「貧しい人々のための優先的選択」は、すべての人のための最終的選択への道である。貧しい人々のために選択するということは、彼らが貧しくさせられているようであつてはいないというだけでなく、彼らの貧しさを永続させているものが何であれ、あるいは誰であれ、

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

それに対して挑戦するということである。もし私たちが他者を抑圧する構造に関わっているなら（事実そうであるが）、私たちはその構造を変革するか、そこから手を切るかしなければならぬ。もし私たちがそれをほっておくとしたら、私たちにはそれだけの力量がないのだという評価が下されるに違いない。これは犠牲者のためだけでなく、私たちの救いにも作用を及ぼす。なぜならば他者を非人間化することにおいて、私たち自身も非人間化するからである。私たちは変革に伴う社会的手術を恐れるかも知れない。しかし結果は私たちにとっても最終的に有益となるであらう。もし誰もはや抑圧したり殺したりすることができなくなれば、それはすべての人にとって良き知らせである。

4 イエスは無礼な行為に加えて、侮辱を与えることにも熱心であるように見える。会堂の中で彼は、貧しい人々が良き知らせの受領者であり、聴衆のほとんどはそれから除外されていると言っているだけではない。社会から見捨てられている人々、宗教者でない人々、異邦人や異文化の人々が優先的取扱いを受け、その他の人々は除外されるということをも語っている。それはヨベルの使信およびイザヤの使信を突き詰めたものであるが、その晩のやりとりによってイエスは本当に人々の憤激を買うことになる。

イエスは「預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである」（ルカ四・二四）と言いながら、預言は自分において成就したと述べる。それによってイエスはますます拒否反応を招くことになってゆく。彼はナタン事件の時と同じように物語を語ることによって、記録には残っているもののあまり記憶には残っていない出来事を思い出させようとする。「エリヤの時代の飢饉を憶えているか」「あの時イスラエルには多くのやもめがいたのに、私たちイスラエルの預言者エリヤは彼女たちを無視して、外国であるシドンの女性を慰めた」と彼は言う。これには多くの溜息がもれて、イエスは女性の支持票を失ったことであろう。自分たちは何と言おうと神の民であるのに、神は私たちの国の女性をかまってい下さらないのかというわけである。

しかしイエスは話をやめようとしなかった。男性に対する話もあるというのである。「エリヤの時代にひどく病が広がったことを憶えているか。当時イスラエルには多くのらい病人がいた。しかし私たちイスラエルの預言者であるエリシャはそのうちの誰のところにも行かなかった。その代わりに異邦人でありシリア人であった敵軍の指揮官——まさしくあの残忍なナアマン、かつて指定地域外をさまよっていたらくだの隊商を皆殺しにした張本人——を癒したのである」。その場にいた人々はこの言葉にあっけにとられ、完全に險悪な状態に立ち至った。

イエスが攻撃的であったことは明白である。彼は会堂で礼拝することと神の恩恵を得ることの

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

間に必然的關係はないということを、実に無作法な仕方で指摘したのである。イスラエルの民であるとか、南部バプテストの教会員であるとかは、神の恩恵が（もしあるとしても）すべての人の中で一番最初に来るということの保証にはならない。神の採点表では最後の者が最初になって、最初の者が最後になるかも知れない。それは控え目に言っても不愉快な採点法であり、敬虔さや善意といったことを実際無意味なものにしてしまう。それは全く頭に来てしまうことである。

5 イエスの使信には古いことと新しいことがあり、私たちはその両方を必要としている。

一方でイエスが語ったことは、役員が（会堂司と小声で相談した後）彼の肩を叩いて聖書日課を朗読して少し解説してくれないかと頼んだ時、とっさに思いついたことではない。イザヤ書第六章は預言者の伝統についての有名な箇所であるが、イエスははっきりと自分をその中に位置づけている。それだけでなく、彼の言葉には神からの認証が刻印されている。イエスは、「私は故郷を出てからいろんな考え方をするようになりましたのでその話をしましょう。皆さんの御意見はお茶の時間にうかがいます」と言って話を始めてはいない。代わりに彼はあからさまに、「主の御霊がわたしに宿っている」と言って、イザヤの言葉を自分に当てはめている。それはおよそ人が望むことのできる神からの最高の認証であろう。そしてその認証は強烈なほどに具体的

である。なぜ「主の御霊」は彼に宿っているのか。それはイエスが告げているように、「（主の御霊は）貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである」。それはまさしく主の御霊が何であるかを意味している。すなわち貧しい人々、捕われている人々、抑圧されている人々は皆ヨベルの約束の受領者なのである。神を被抑圧者の問題と連結させるのは、新しい考え方であろうか。そうではない。古くからのものである。何世紀も前からあったものである。それを真剣に取り上げ始めるべき時が今来ているのである。

そしてここにおいて新しい要素が入ってきている。というのはイエスは朗読を終えるやいなや、この知らせはもはや将来のための夢ではないと宣言しているからである。彼が述べていることは、「いつの日にか、みこころであれば、この聖句は成就するであろう。おそらく、あなたがたの孫の代が耳にするであろう」ではなく、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」（ルカ四・二一）である。この宣言には誤解の余地がない。

それにもかかわらず会衆は当初誤解をし、明瞭でよく押さえた声のイエスの話についてさまざまな論議が起こることになる。会衆はイエスがサレプタのやもめやシリヤのナアマンに関して不穏な論評をするようになるまでは、彼が語ることに本当に耳を傾けようとはしていなかった。彼らは自分たちが聞いたことが気に入らなかった。彼らはイエスに言った、「お前は、私た

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

ちは今すぐすべての人を受け入れるべきであって、それを阻むようなことがあればそれを**変革**しろとでも言っているのか」。

以上のような新しい視点から、できるだけありのままに再度聖書の言葉に耳を傾けてみよう。

大地をこれ以上搾取すべきではない。奴隷は解放すべきである。負債は帳消しにすべきである。不正に獲得した資本は再分配すべきである。搾取を永続化するいかなる政治的、経済的、社会的、宗教的構造をも変革し、貧しい人々（物質的に貧しい人々）、捕われている人々（犯罪者とされた人々）、盲人（実際に目の見えない人々）、被抑圧者（虐げられている人々）の窮状を逆転してゆく決意のある社会をつくり出すようにしなければならない。ヨベルの年によってもたらされるのは、この世で現在苦しんでいる人々に対する精神的慰めではない。ヨベルの年はこの世で現在すでに進行中であることを具体的に描写しているのである。

クラレンス・ジョーダン**は**教会を「イエス運動」と呼んでいるが、教会はこのような変革をもたらすためにささげられたものである。もしそう思わないならば、ヘロデかピラトに尋ねてみるがよい。二人とも頭がよかったから、いかに有難くない脅威をイエスがもたらしたかを理解して

いた。彼らはユダヤ人指導者たちがやり損じていた仕事に決着をつけるだけの政治的軍事的影響力を持っていた。少なくとも彼らはそう考えていた。

ここまでのことを踏まえて、いくつかの練習問題をやってみよう。

* 聖書の記事は政治的、経済的、社会的生活を再構成することについて語っているが、これは私たちの政党や経済体制や生活様式との関わりにおいて何を語っているであろうか。キリスト者は真正面から攻撃をかけるべきか、それとも体制内での漸進的変革に努めるべきであるか。キリスト者の闘いの戦術は、(a) アメリカに支援された独裁者が動かしているラテン・アメリカの小国、(b) 広範な秘密警察を持って独裁路線に沿って動いている超大国、(c) 裕福な者には特権があるが貧しい者には経済的機会が欠如している国、においてはそれぞれ違うのであろうか。

* 異邦人や外国人(シドン人やシリヤ人)がユダヤ人宗教者よりも先に神の憐れみを受けるかも知れないと言ったイエスの主張は、現代ではどのようなことになるであろうか。進路を外れてきまよっていたらくだの隊商を皆殺しにした男に神の特別な関心があったとするならば、このことは、進入禁止区域に迷い込んだ韓国民間航空機の撃墜を命令した人々に関しては何んかことを意味し

6. ナザレのイエス——「貧しい人々への良き知らせ」

ているであろうか。

* ヨベルの年という制度が導入されたならば、現代社会は本来の姿を回復することができるであろうか。ヨベルの年のどのような特色を私たちの世界に移し替えることができるであろうか。(仕事、食物、土地、住居を持っていなければ、この問いに対して違った答が出てくるのであるか。)

* ニカラグアのソモサ一族は四〇年にわたって組織的に農民の土地を没収した。(一族の一人がアメリカに支援されてニカラグアを独裁支配していたので、それは特に難しいことではなかった。) ソモサ政権が打倒されてサンディニスタ民族解放戦線が政権を掌握した時、彼らは土地を元の所有者に返還し始めた。(ソモサ一族の土地所有はあまりにも巨大化していたので、すべての土地が全面的に再分配されたら、ニカラグアの全農家は五エーカーの土地を得ることになるであろう。) 多くのキリスト者農民は、先祖の土地が戻ってきたことをヨベルの年の約束の成就にたとえたが、あなたがたにとってこれはもっともな反応だと思えるであろうか。

* 「貧しい人々のための優先的選択」は、神はすべての人を愛しておられるという信仰と本當に両立するであろうか。

* 幸福や快適さは、神の意志を遂行してゆく上での障害物となりうるだろうか。ヒュー・T・カーの讃美歌『私たちの生命の神』にある思いもよらない一節について考えてみよう。「主よ、私たちが強く、なっている時、そのままにしておかないで下さい」。